

愛の変容、或いは愛への変容

——『単純な魂の鏡』における超越への開け——

村上 寛

はじめに

本稿が注目するのは、中世末期における一つの「愛」の思想であり、具体的には一三二〇年に異端者としてパリで処刑された女性、マルグリット・ポレート (Marguerite Porete) の「愛の変容 (muance d'amour)」¹⁾「愛への変容 (muer en amour)」²⁾についてである。キリスト教の歴史において愛は意志と結びついた重要な概念であり、意志を巡る理解が一つの大きなテーマとなっているポレートの著作『単純な魂の鏡 (Mirouer des Simples Ames)』³⁾以下『鏡』⁴⁾でも、「愛」の理解は彼女の思想について理解

する上で極めて重要なものであると言える。

本稿では『鏡』における「愛」の思想の中でも極めて特徴的な概念である「愛の変容」「愛への変容」に注目し、上昇と転落というモチーフを参考に、「愛の変容」に至る過程及びその根拠、その内実について明らかにしていきたい。「愛の変容」に至る過程及びその根拠については『鏡』の存在理解、魂理解を、そしてその内実については意志と自由意志の概念について考察することで、『鏡』における「愛」の概念に迫りたい⁵⁾。

1. 魂の七つの状態

『鏡』は「生の完成と平和の存在をより価値あるものとするため」³⁾に書かれたとされている著作で、ここでは魂が最終的な栄光の状態に至るまでに辿る七つの状態乃至段階が存在すると語られているが、第一の状態から第二の状態へと順を追ってその内容や移行方法が語られているわけではない。記述の中心となっているのは特に「滅却された魂 (ame adientie)」と呼ばれる第五の状態がどのようなものであるかということであり、本発表の主題である「愛の変容」「愛への変容」もこの状態での出来事であるとされている。しかしそのような状態に至るためには第四の状態までが前提としてあり、またそこには神と魂を巡るポレート独自の存在理解があるのである。

そこでまずは第五の状態に至る前段階としての第四の状態までについて確認したい。

2. 1. 第四の状態への上昇

『鏡』における「愛の変容」について詳細な研究を行

ったモンマース (P. Mommaers) が指摘するように、『鏡』では魂の上昇と下降というイメージが見られる⁴⁾。一一八章では第一の状態から第七の状態までが体系的に紹介されており、そのような一連の状態は「谷から山頂へ」⁵⁾の一連の上昇過程と考えられている。つまり第一の状態よりも第二の状態のほうが優れており、魂は順を追って上昇していくのだが、第四の状態を頂点として魂は「転落」(cheoir) することになるのである。転落について説明する前に、まずは上昇の過程とその内容について確認しておきたい。

まず第一の状態で魂は「恩寵を通じて神に触れられ、その力で罪を取り去られ」、「神が法において命じるその命令を守るという意図を持つ」⁶⁾ようになる。「罪が取り去られる」とはキリスト教徒としての洗礼を受けることであり、つまりこの第一の状態とは信仰の道に入ることである。魂が辿る七つの状態とは誰もが自動的に辿るようなものではなく、信仰に目覚めた人のみがその可能性を開かれると考えられているのである。

神が命じることについて心をとめ、実行するようになった魂は、やがて神が命令することを守るだけでなく、そ

れを超えて「自然本性を抑圧し、富、心地よさ、名譽を輕蔑する」⁽⁷⁾ ようになる。これが第二の状態である。ここでいう自然本性とはほとんど肉体の意味であり、自然本性を抑圧するとはつまり肉体にまつわる欲求を控えるようになることを意味する。富や肉体の心地よさ、名譽とは被造的物事及びその相互連関に根拠を持つ価値のことであり、第二の状態の魂はとはつまり、そのような現世的な価値連関を離れた魂のことである。

現世の富や快樂を離れた魂は第三の状態で「善の働さしか愛さなくなる」⁽⁸⁾ のだが、またそのような善の働さを放棄するとも言われている。善の働さを愛するにも関わらずその働さを放棄するとはどのような意味だろうか。

第二の状態が、肉体にまつわる主體的欲求から離れる段階であつたように、第三の状態は精神にまつわる主體的欲求から離れる段階である。「善の働さを愛する」とは、自らの主體的な意志によつて善き働かを選び、為すことであるが、魂はそのような働かを放棄し、「働かきと意欲を控えること」で別の意欲に従う⁽⁹⁾ ことを自らに義務づけるようになるのである。つまり精神にまつわる主體的な働かきや意欲を控え、それによつて別の意欲、つまり神の意欲に自

分自身を委ねようとするのである。

第四の状態はほとんど、いわゆる神秘家が目指す完成の状態と言える。神の教えを守り、俗世の価値、つまり被造物間の価値連鎖から離れ、精神の主體的働かきや意欲を控えるようになった魂は、その時次のような状態にあると言われる。

魂は愛の高揚によつて、冥想を通じて思考の心地よさへと引き寄せられ、一切の外的労苦から離れ去り、観想の高揚を通じて他のものの支配から離れ去ります。そのとき魂は非常に傷つきやすく、高貴で繊細なので、その魂を特別に楽しませ喜ばせる愛の純粹な心地よさによる接触以外の如何なる接触にも我慢することが出来なくなります。⁽¹⁰⁾

ここで語られているのは、魂が主體的に上昇していく、その頂点である。ここで魂は他のものの支配、つまり被造物の影響から離れ、愛の接触、つまり神に触れられることだけを喜ぶ、そのような状態になるのである。

『鏡』の思想的特徴の一つは、しかしこのような、被造

物を離れ、主体的働きを離れた結果得られる至福直観とも言えるような歓喜の状態が乗り越えられるところにある。第四の状態の魂は愛の心地よさに満足しきっているが、このような状態はいわば魂を酔わせ、視界をくらませているとされるのである。この世には第五の状態と第六の状態というさらに二つの状態があるのに、この状態の魂は高慢になり、この状態こそが最高の状態であると考えてしまうのである。

2. 2. 転落

第五の状態は、モンマースが適切に指摘しているように、転落 (Cheoir) である¹²。一一八章では第五の状態に関する説明として、「今やこの魂は愛から無へと転落したのです」と明確に述べられている。しかし「愛から無への転落」とは一体何を意味するのだろうか。何故無への転落が歓喜の状態である第四の状態よりも優れた状態とされているのだろうか。

マッギン (B. McGinn) やハリウッド (A. Hollywood) 最近ではマリリン (J. Marlin) などポレートとベギンミュス

ティクとの関連を重視する研究者たちは¹³、しかし転落という要素よりも、第五の状態における無化、滅却を重視し、それを神化の鍵と見なしている。例えばマリリンは「自己滅却、つまり区別無き神的合一に達するために無の奈落へ沈み込むことこそがベギンのテーマ」であり、『鏡』においては「滅却が全き神化へと導く」のだと述べているが¹⁴、そのような主張の根拠としてあげられているのが、ナザレのベアトレイス (Beatrix van Nazareth, 1200-1268) やハデウエイヒ (Hadewijch, 一三世紀頃) などの著作に見られるベギン思想の代表的モチーフの一つである「溶ける」イメージである¹⁵。その一例としては、ハデウエイヒによる次のような記述があげられる。

私の愛は溶け去ったのです / 愛の狂気の内に
愛が私を投げ込んだ奈落 / それは海よりも深いので
す¹⁵

確かに『鏡』でもこのような水との関連で溶けるイメージが語られている。八二章では第五の状態の魂が神の内に溶け、その名前を、そして固有性を失うということが語ら

れた上で、次のような比喩が語られている。

一滴の水が、海や別の名を持つもの、例えばオワーズ川やセーヌ川や別の川から流れて来るものを作り上げているようなものなのです。その水や川が海へと戻り入るとき、それはいくつもの王国で自分の働きを為しながら流れていたその流れやそれ自身の名前を失うのです。しかし今やそれは海の内であり、そこでそれは安らぎ、そのような労苦を消し去ったのです。この魂についても同様なのです。¹⁶

このように一滴一滴の水が海に流れ入り一になるイメージ、或いは個々の川が海に流れ入ることとそれぞれの固有の名前を失い一になるイメージは『鏡』における神との合一を表す適切なイメージではあるが、十分とは言えない。何故なら、このような比喩は魂が滅却され神と一になるという状況を描写するものであって、その原因や根拠を説明するものではないからである。魂は第五の状態で、上述の海のイメージのように、その固有性を失うことで無になる、つまり何者でもなくなるのだが、それは以下に見ていくよ

うにそもそも魂が真に存在を持たないという意味で無であるということが前提となっているのである。

第五の状態について、ひいては神との一を巡るポレートの魂理解、存在理解について適切に理解するためには、「溶ける」というイメージよりもむしろそこで語られている「無 (rien)」及び「転落」に注目する必要があるだろう。

第四の状態までの魂は自らの意志によって主体的に神に向かつて上昇するが、魂はそのような上昇を、自分の能力による功績であると考えてしまう。それゆえに第四の状態は「魂を愛の豊穡さの内を高慢にするのです」¹⁷と言われていたのだが、これに対して第五の状態で魂は自分自身が「全くの悪である (toute mauvaise)」ことを認識するとされる。

そのように魂は一切なのです。というのも、魂はその悪についての認識の深さによって、あまりに深く大きいので、そこには底なしに深くされた一つの奈落の他には始まりも尺度も終わりも見出すことが出来ないというところを見やるのですから。見出すこともなく、底

もないその場所で、魂は自分自身を見出すのです。¹⁸

魂は自分自身が全くの悪であり、しかもその悪が計り知れないほどに底なしに深いことを見出す、その底なしの悪とはつまり自分自身のことである。第四の状態では未だ神の接触を受け取る自己があつたが、ここではそのような何かの起点或いは受け皿となるものはない。そしてそこで魂は固有の自己の存立基盤が悪の奈落であり、底が無く、つまり無であることを見いだす。つまり第四の状態までの主体的上昇は被造的価値連鎖の枠内でのみ意味を持つ上昇だったのであり、第五の状態で魂はいわばその足場を失つて転落するのである。

しかし魂が全くの悪であり無であるとはどのような意味で言われているのだろうか。それは、神が存在であり、魂は存在を持たないという理解に深く関わっている。一一八章では第五の状態についての説明として、まず次のように語られている。

第五の状態では、その魂は一切の事物がそれによって存在するところの在りて在る神について考え、そして

如何なる事物もそれによって存在しているわけではない魂自身が存在しないということについて考えます。¹⁹

この箇所で言われているのは、つまり一切の存在する事物がその存在の根拠を神に持つており、魂それ自身は如何なる存在の根拠も持つていないということである。魂は実体をもつて存在しているわけではなく、川と海の譬えで言うなら名付けられることによって、相対化され固有性を持つことで、仮初めの存在を持つてにすぎないのである。魂は元々海にあつて無だったのであり、その固有性としての存在なしにそこに戻るべきであるとされているのである。一一八章では次のように言われている。

光を通じてその魂の内に注ぎ込まれたその神的の運動は、存在しているが存在しているべきではないその場所から「魂の」意欲を移動させ、そこからやつてきたところの、存在しているべき、存在しないその場所に魂を再び据えるために（ラテン語版のみ）存在しているものの等しさと、存在していないものについての

知識を) 魂の意欲に示すのです。²⁰⁾

この箇所で「存在しているが存在しているべきではないその場所」と言われているのは、つまり魂が被造的世界内での相関性においてそれぞれの固有性を持つという意味でその固有性において存在しているが、そのような在り方が非本来的な在り方であることを示している。「存在」がただ神にのみ相応しい言辞であるために真に存在であるのは神のみであり、それゆえに魂がその固有性において存在していると言われるその在り方は、仮初めのものである。という意味で本質的には無であると理解されるのである。その上で魂は、そのような固有性において存在する場所から「存在しているべき、存在しないその場所」へ再び据えられるとされているが、「存在しているべき、存在しないその場所」とは何を意味しているのだろうか。一三五章では次のように語られている。

というのも、神が存在し、魂が存在しないということ
で魂には十分だったのですから。そのとき魂は一切の
事物から脱がされたのです。というのも、魂はその魂

が存在するようになる前に存在した場に存在なしに存在するのですから。²¹⁾

このように第五の状態の魂は、固有性を持った存在として存在するようになる前に存在した場、つまり神の内、自分自身に由来するような如何なる存在の根拠もなしに、また如何なる場所も持たず、無なるものとして在るのである。つまり魂はその固有性において存在するようになる前には如何なる存在を自分に固有のものとして持つことがなく、そのような意味において存在していなかったのだが、しかしただそれだけが「存在」であるそこに根拠を持つものとして存在したのであり、第五の状態の魂はそのような意味で「存在するようになる前に存在した場に存在なしに存在する」のである。

このような意味において神は存在し、魂は無であるのだが、神は存在でありまた善である。従って、存在であるものは善であり、存在を持たない魂は悪であるということになるのである。

というのも、神の他には何も存在しないのですから。

というのも、存在するものは、神の善に由来するのですから。そして神は善を通じて与えたどんな部分についても、その善を愛しているのです。²²

つまり、存在するものは神に由来するものであり、善である。魂が持つ、被造的世界の価値連鎖に基づく固有性における存在は神に由来するものではないがゆえに真に存在するものではなく、悪なのであり、それゆえに魂は自己の固有性において在る限り「一切の邪悪の根 (la racine de tous maux)」であると言われるのである。

このように魂は固有性を持つ限り真に存在を持たないという意味で無であり、悪であるために無なるものなのであるが、魂がその固有性において全くの悪であり、悪の奈落であることはポレートにとって、また救済の条件でもある。無限の転落はまた飛翔であり、真の上昇なのである。

3. 上昇、飛翔

第四の状態を山の頂点とするなら、神は天である。自らの足で山を登る者は決してそれ以上昇ることは出来ない。

第四の状態の魂は山頂で、愛によって触れられることに満足していたが、第五の状態で自分自身が無であることを見やり、足場を失って転落する。これが先に言われていた「愛から無への転落」である。モンマースはこの転落を自己無化、滅却の契機とみなし、魂が「受容可能な奈落」となることで現前せる神の受容としての合一が成立すると理解しているようだが²³、それだけでは「愛の変容」や「愛への変容」と言われていることに対する解釈として不十分であるように思われる。すなわち、第五の状態の魂ではそのような無への転落と同時に、その無を根拠として、「愛の変容」「愛への変容」が生じるのであるが、何故無であることが変容の根拠なのだろうか。また変容が「愛の」、「愛への」と言われていることにはどのような内容が含まれているのだろうか。

そこでまずは無が変容の根拠であることについて、その構造及び理解を以下確認していきたいが、それは前節で確認したように、無が悪であるということと深く関わっているのである。

3. 1. 変容原因としての悪

悪に関する議論が集中しているのは一一七章と一三〇章である。以下それらの箇所の記事に従って、悪が何故変容の根拠であるのかについて確認してみたい。

『鏡』では神が善であり魂が悪であることが強調されてきたが、一一七章では大胆にも、魂が悪であるがゆえに善を持つという事態が語られている。

今や、私「魂」は一切の悪であり、神は一切の善なのです。より貧しき者には施しを与えるべきであり、さもなければ正当な権利によってその人のものであるものがその人から取り上げられるのです。神は不正を為すことが出来ません。というのも、そのことは自らを減ぼすことでしょうか。そのようなわけで、私に必要であるという事情のために、そしてその純粋な善の正当性のために、その善は私のものなのです。²⁴

ここでも悪が無であり、一種の欠如であり無所有であることがうかがわれるが、より重要なことは、善が豊穡さで

あり、しかもそれが正当な施しとして与えられるべきであると述べられていることである。しかもその善は一部ではなく、全く完全に与えられねばならない。何故なら、「その全き善の豊穡の極致より劣るものは、私に固有な悪の根底の奈落を満たすことは出来ない」²⁵ からである。そのようにして善は与えられることによって魂のものになると言われているのだが、次の一三〇章の引用箇所が示すように、一方で魂はその善について、また自分自身の悪について認識出来ないとされている。

もし私「魂」が私の悪を理解することが出来るなら、私はあなた「神」の善について理解するでしょう。それが尺度になつていのですから。このために、存在しているところのものと同様に、私は自分の悪について何も知らないのです。このために、存在しているところのものと同様に、私はあなたの善について何も知らないのです。そして主よ、私が自分の悪を持っているという認識を私に与えたあなたの善について、私はほとんど何も知らないのです。²⁶

このように、魂は自分が悪であることは認識出来ても、その悪がどれほどのものであるかを理解することは出来ない。悪の奈落についてほんの一部でも認識することは神の善について一部でも認識することが出来るということであり、そのようなことはあり得ないからである。魂は自分自身の無へと転落しつつ、ただ自分の悪の深さだけを知る。しかしそのことによつて魂は正しく神を見るのである。

今やこの魂は下降の根底の底に位置づけられたのです。そこには如何なる底もなく、このためにそこが根底となるのです。そしてこの根底が魂に、至高なる善の真の太陽を非常にはつきりと見せるのです。というのも、魂はその眼差しを妨げる如何なるものも持たないので、
すから。²⁷

このとき魂には如何なる認識の根拠となるものもなく、その眼差しを妨げるものもない。このようにして魂は悪について認識することなく悪を見やり、善について認識することなく善を持つようになるのである。

3. 2. 変容

悪である魂はこのように、その悪のために善を与えられないのだが、悪であるためにまた無である魂は、その無に対して存在を与えられる。より正確には、一切の悪であるがゆえに一切の善を持つ魂は、愛の変容によつて、存在である神にのみ正しくその存在の根拠を持つものとして、しかし無なるものとして、神において存在するようになるのである。第五の状態の魂は一一七章で「私は私の悪の原因のため以上にその善を持つてはいないのです」と語った上で、自らの「存在」について次のように語っている。

そして私「魂」がその一切の善を持っている以上、私は愛の変容を通じて、彼「神」であるものと同じものとして存在しているのです。というのも、もつとも優れたものもつとも劣るものをそれ自身の内へと変化させるのですから。²⁸

魂が「愛の変容を通じて、神であるものと同じものとして存在している」と言われているように、重要なことは、

魂がそれ自体の固有性において存在するようになるのか、神になると言われているわけではないということである。つまり、主体としての魂が何かへ変化する事態が「変容」なのではなく、無である魂が悪であり無であることを根拠として、ただ神のみが存在するというそのことにおいて、無なるものとして全面的にその存在に参与するようになること、それが「愛の変容」によって成立する事態であり、「愛への変容」なのである。

八七章では、存在を持たないはずの魂が「私は存在するのです」と語った上で、その理由が次のように語られている。

というのも、愛には始まりがなく、終わりもなく、限度もないのであり、私は愛に他ならないのですから。そのとき私はどうしてそれ「魂としての存在」を持つのでしょうか？ それは存在出来ないのです。²⁸

このように存在を持つのは愛である神だけであり、魂は存在を持たないと言われている。従って、二三章でも「愛はその正当さによって自分自身への変容を行うのです」²⁹

と言われているように、変容する主体となるのは愛であり、それゆえに「魂の変容」ではなく、「愛の変容」と呼ばれるのである。このような魂と愛を巡る変容について、八二章では海と川の関係が比喩として使われていたが、二五章では炎の喩えが用いられている。

燃えている人は冷たさを持たないし、溺れている人は乾きを持ちません。今や、と愛は言う、燃え盛る愛の炎の内では燃えているそのような魂はまさしく炎になり、このために魂は全く炎を感じることはないのです。というのも、その魂の内においては、魂を愛の炎によって変容させた愛の力のために、魂自身が炎なのです³⁰

このように、魂が炎を生じさせるのではなく、愛である炎が魂をその炎によって変容させるのである。

しかし、愛とは何だろうか。一般的に愛と言った場合、そこには利己的な愛や欲情愛といった否定的な観念も含まれるが、『鏡』ではそのような側面について積極的に取り上げられていない。問題は愛(Amour)と愛徳(Charite)

の関係である。ライヒト (I. Leich) 等が指摘するように、『鏡』における愛の観念にサンティエリのギヨーム (Guillaume de Saint-Thierry, 1085-1148) をはじめとしたシトー会的な思想が見られることは確かだが⁽⁸²⁾、ここでは特に「愛の変容」について論じるために、愛に焦点を絞って考察を進めていきたい。

『鏡』において愛と言われる場合、そこには二つの層が見られるように思われる。すなわち、神である愛と、愛することという働きとしての愛である。ポレートは働きとしての愛という通常の意味に加えて、特に主格的存在として神である愛を示した場合、至純の愛 (Fine amour) という用語を使っているのである⁽⁸³⁾。

至純の愛とは、一二世紀頃に現れた、トルバドゥール (Troubadour) による詩歌で用いられた愛の観念である。その特徴は、それが男女間の愛、特にその多くは男性から既婚女性への愛であること、そしてその女性を最大限に尊重し、その女性に尽くし、情熱的に求め、それにも関わらず成就されないことで高められ、昇華された愛であるということである。そのような愛はまた宮廷風恋愛 (amour courtois) とも呼ばれ、その名が示すように、洗練された

上流階級の愛として表現される。

『鏡』では至純の愛という表現に加えて、その宮廷風恋愛という表現も見られる。また高貴な (noble) や気前よき (largesse) といった用語の使用やその価値観の重視、それに宮廷 (palais, court) や血筋 (lignage) といった表現など、トルバドゥールからの影響は明らかであるが、『鏡』における至純の愛という観念はもちろんそのような意味の愛として用いられているわけではない。『鏡』の性質上、それは当然男女間ではなく神と魂との間の愛であるが、それ以上に重要なことは、至純の愛が関係及び感情としての愛ではなく、神自身と捉えられていることである。二六章で「というのも、慰めの感覚のために神の慰めを求める者は、そのことが至純の愛 (Fine Amour) の支配を妨げてしまうことになるでしょうから」⁽⁸⁴⁾ と言われているように、至純の愛は働きとしての愛というより、むしろ支配や影響力の主体となるような主体的存在者として捉えられているのである。

さて、至純の愛がつまり神自身であるのに対して、愛することという働きとしての愛はつまり意志である。一一五章では聖霊が意志であり、愛であることが述べられている

が、至純の愛と意志としての愛との関係を最も端的に表しているのが一三三章の次の記述である。

すなわち、「魂は」至純の愛が持たせる唯一の意欲を持つているのです。というのも、至純の愛が一つの愛と一つの意欲を持たせたのであり、このために私「魂」の意欲は何一つ意欲しないことになったのですから。そしてそのような愛は、神的働きによって自存している、唯一の純粹なものに由来するのです。⁵⁵

後述するようにポレートは意志 (*volente*) と意欲 (*volunté*) を区別しているのだが⁵⁶、ここでは至純の愛が愛と意欲を持たせた者として示されており、明らかに至純の愛と意志としての愛とが区別されている。第五の状態の魂は愛へと変容し、愛になるのだが、それは至純の愛が持たせる愛、つまり意志と一なのであって、神である至純の愛それ自身になるわけではないのである。

「愛の変容」「愛への変容」と言われる場合の愛は、つまり意志としての、働きとしての愛である。九三章で次のように言われているように、魂は自分自身の意志なしに無な

るものとして、神の働きである意志としての愛へと変容するのであり、言うなれば愛によって上書きされるのである。

しかしその魂が砂漠の内にあつたとき、愛がその魂を支配し、滅却したのであり、それゆえに愛はそのとき魂の内、魂のために、魂なしに働いたのです。⁵⁷

このように、魂が愛へと変容するということは、魂自身がなんらかの主体的存在として愛に成り代わることであることを意味するのではなく、滅却されることで愛が魂の内、魂の主体的働きなしに十全に働くようになるということであり、そのような意味において魂の変容ではなく、愛の変容と言われるのである。

以上が「愛の変容」「愛への変容」の概要だが、ここで一つの疑問が生じる。自己の意志なしに神の意志と一になるなら、そのとき魂に自由意志は存在しないのだろうか。存在するとするなら、それはどのように秩序づけられるのだろうか。

4. 自由意志

第五の状態で意志が滅却され、意志としての愛へ変容した愛である魂は、特に「滅却された魂 (ame admentie)」と呼ばれるのだが、そのような魂はまた「自由な魂 (ame enfranchie)」とも呼ばれている。しかし意志を滅却された愛である魂が、意志を持たないにもかかわらず自由であるとはどのような意味なのだろうか。

それは、滅却される意志とはつまり被造的世界の価値連鎖に基づいて形成された意志のことであり、そのような意志の根源である自由意志それ自体が消え去るわけではないということの意味している。自由意志が神から与えられたもので、決して取り去られないということは一〇三章で次のように語られている。

そもそも私「魂」がそれ「罪を犯すこと」を望むなら、どうして神がそれを許さないでしょうか？ もし神がそれを許さなかったなら、神の力が私から自由を取り去ったことでしょう。しかし神の善は、その力が私から何かを奪うことを許すことが出来なかったのだ

す。これは、もし私の意志が同意しようと望むのであれば、如何なる力も私から私の意欲を奪うことがないということの意味しています。今やその善が、純粹な善によって、善を通じて私に自由意志を与えたのである。⁸⁸⁾

このように魂は意志における自由な選択可能性という意味での自由意志を与えられているのだが、第五の状態の魂にとつてそれは単に選択可能であるというだけで、実際に選択実行されるわけではない。というのも、神の意志である愛と一である第五の状態の魂がその固有性において何らかの対象在意欲することは、愛と一であるそのような状況を妨げることであり、あり得ないからである。そのような魂が、何らかの被造的事物を対象としてその意欲を働かせることは単に可能であると言われているにすぎないということ、八二章でも次のように言われている。

魂は信じ主張しているのですが、神が善以外の何かを意欲することが出来るというのは単に可能であるということにすぎないし、同様に魂がその神的意欲以外の

何かを意欲することが出来るのは、そうすることが出来るということを主張しているにすぎないのです。³⁸

ここで注意すべきは、滅却された魂が神的意欲を意欲することが可能であることが示唆されていることであり、しかもそれが意欲ではなく意欲と言われていることである。何故あえて意欲と言われているのだろうか。それは、意志が対象選択を伴う何らかの対象へと向かうための能力原因として理解されているのに対して、意欲がそのような意志によつて生じるその働きと理解されているからであると思われる。すなわち、滅却された魂は対象選択を伴うような固有の意志を持たないが、それによつて、全く対象選択を伴わない意志の働きである意欲を持つのである。そしてそのような意欲こそが神の意欲であり、そのような意欲を生じさせるものこそが神の意志であるとされるのである。一章では、滅却された魂の内神の意志によつて意欲が生じる事態が次のように語られている。

ああ、まさに、その通りです。この魂が同意の下で望む全てのことは、彼女が望もうとしていることを神が

望んでいるということなのであり、そしてまた魂はそれが神の意志であるために満たそうとしているのであって、魂自身の意志のためにはそんなことをしません。そして魂が自分からそれを意欲することはあり得ず、神の意欲が魂の内ですべて望むのです。それゆえこの魂が、それが意欲すべき全てのことを意欲させる神の意志を除いて、全く意志を持たないことは明白です。⁴⁰

このように滅却された魂は自由意志を持ちつつ、自らに固有の意志を持つことなく、神の意志による意志の働きを持つのである。

ところで、固有の意志を持つことは固有性乃至被造性に基づく選択行為であり、自己をその対象と関係づける行為であるが、それは神ではないものに自らを関係づける行為である。そして自由意志とは、如何なる対象とも関係づけられていない自由な選択可能性それ自体の開けであると理解される。従つて、固有の意志なしに、同意において自由な選択可能性それ自体を開くことこそが、魂の内神の意志と一であり、その意志が働く正当な条件なのである。固

有の意志を働かせることが出来るということが自由なのではなく、あらゆる選択可能性に開かれていることが真に自由なのであり、それゆえに滅却された魂はまた自由な魂と呼ばれるのである。

5. おわりに

ポレート『鏡』における「愛の変容」「愛への変容」の内実とその根拠、そしてそれが生じる魂の状態についてここまで確認し、考察してきた。信仰の道に入った魂は被造的物から離れ、固有性から離れはじめることで神へと上昇していくが、そのような上昇には限界があり、その限界を超えることが第五の状態における転落であり、滅却だった。魂はその固有の意志を滅却されることで、存在でありまたその根拠である神に比して自分自身が無であり、悪であるために、愛によって愛へと変容させられるのである。そのとき魂は固有性を持つことなく、神と一つの意志、一つの意欲を持つのだが、それは魂の自由意志が消えてしまふということではなく、如何なる対象とも結びついていない真に自由な自由意志の全面的な同意によって達成される

事態なのである。そのようにして被造物である魂は、人と神の間の淵を越えて神になるのではなく、自らを完全に開くことで神の意志である愛と一なのである。

注

- (1) 『鏡』本文の訳文は以下の Guarnieri 校訂のフランス語版を基本とし、適宜同書対訳の Verdeyen 校訂のラテン語版及び各国語現代語訳を参照した。Marguerite Porete, *Le miroir des simples âmes*, édité par Romana Guarnieri / Margaretae Porete, *Speculum simplicium animarum*, cura et studio Paul Verdeyen, Corpus Christianorum Continuatio Mediaevalis 69, Turnhout, Brepols, 1986. なお『鏡』の邦訳としては中原暁彦氏による一部邦訳がある。富原眞弓 編訳・監修『女性の神秘家』（上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成15』）平凡社、二〇〇二年、六七二―七〇〇頁。

- (2) ポレートは異端者として歴史の表舞台から葬られ、二〇世紀になってから「再発見」された人物であり、その人物像及び生涯について分かっていることは少ない。ポレ

- ート及び『鏡』についての概説は上掲『女性の神秘家』における中原氏の解説及び以下の拙稿を参照して頂きたい。「ブルタリット・ポレーテの『単純な魂の鏡』について」『哲学世界』第三二二号、早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻哲学コース、二〇一〇年、四七一―五一頁。
- (3) Porete, *Le miroir*, cap. 2, linea 4.
- (4) Mommaers, Paul, “La transformation d’amour selon Marguerite Porete”, in *Ons Geestelijc Erf* 65, 1991, pp. 89-106.
- (5) Porete, *Le miroir*, cap. 118, linea 5.
- (6) *Ibid.*, linea 8.
- (7) *Ibid.*, linea 30.
- (8) *Ibid.*, linea 39.
- (9) *Ibid.*, linea 53.
- (10) *Ibid.*, linea 66.
- (11) Mommaers, P., “La transformation”, p. 95.
- (12) Hollywood, Amy, “Suffering Transformed: Marguerite Porete, Meister Eckhart, and the Problem of Women’s Spirituality”, in McGinn, Bernard(ed.), *Meister Eckhart and the Beguine mystics : Hadewijch of Brabant, Mechthild of Magdeburg and Marguerite Porete*, New York : Continuum, c1994, pp. 87-101.
- (13) Marin, Juan, “Annihilation and Deification in Beguine Theology and Marguerite Porete’s Mirror of Simple Souls”, *Harvard Theological Review* 103, 2010, p. 99.
- (14) McGinn, Bernard, “Ocean and Desert as symbols of mystical Absorption in the Christian Tradition”, *The Journal of Religion* 74(vol. 2), 1994, p. 174f.
- (15) “Mi semelten mine sinne / In minnen oerwoede; / Die afgront daer si mi in sende / Die es dieper dan die zee”, Mierlo, J. van, *Hadewijch : strophische Gedichten*, Standard-Boekhandel, 1942, p. 45.
- (16) Porete, *Le miroir*, cap. 82, linea 40.
- (17) *Ibid.*, cap. 118, linea 72.
- (18) *Ibid.*, linea 130.
- (19) *Ibid.*, linea 94.
- (20) *Ibid.*, linea 105. (一部フランス語欠損箇所につきラテン語版を併置した。)
- (21) *Ibid.*, cap. 135, linea 13. (フランス語欠損箇所につきラテン語から引用し、翻訳した。)
- (22) *Ibid.*, cap. 118, linea 190.
- (23) Mommaers, P., “La transformation”, pp. 100-102.
- (24) Porete, *Le miroir*, cap. 117, linea 14.
- (25) *Ibid.*, linea 24.
- (26) *Ibid.*, cap. 130, linea 54.
- (27) *Ibid.*, cap. 118, linea 147.

- (28) *Ibid.*, cap. 117, linea 67.
- (29) *Ibid.*, cap. 87, linea 8.
- (30) *Ibid.*, cap. 23, linea 33.
- (31) *Ibid.*, cap. 25, linea 9.
- (32) Leicht, Irene, *Marguerite Porete : eine Frau lebt, schreibt und stirbt für die Freiheit*, München, Don Bosco, 2001, pp. 218-221.
- (33) ラテン語版でこの至純の愛 (Fine amour) は主に *purus amor* と訳されているが、フランス語の表現として *Pure amour* という表現があり、それも同様に *purus amor* と訳されており紛らわしいので、ここでは至純の愛 (Fine amour) に絞って論を進めよう。
- (34) Porete, *Le miroir*, cap. 26, linea 15.
- (35) *Ibid.*, cap. 133, linea 29.
- (36) 意志と意欲の区別はクレルヴォアのベルナルの自由意志に関する議論に由来すると考えられるが、詳細については別稿に譲りたい。
- (37) *Ibid.*, cap. 93, linea 8.
- (38) *Ibid.*, cap. 103, linea 15.
- (39) *Ibid.*, cap. 82, linea 23.
- (40) *Ibid.*, cap. 11, linea 161.